

死ぬために生まれた方

D. McIntyre

クリスマスについてよく知られている事

私はかなり長い間日本に住んでいても、驚く事が一つある。それは、大抵の日本人がクリスマスの事を詳しく知っている、ということである。

日本はキリスト教によって殆ど影響されていないと一般的に思われているが、日本人の子供にクリスマスについて聞くと、彼らは細かい事までクリスマスを知っているようである。例えば……白い衣を着る天使が、空を飛んでラテン語の歌を歌うとか……不思議な星とか……不思議な赤いヘッドライトがついて、となかいに引張られるそりとか……飼葉おけに寝るあかちゃんとか……らくだに乗っている三人の偉い博士……などという事はよく知られているようである。

実に、クリスマスの物語は美しい、珍しい、叙情的なおとぎばなしとして日本人の心を引張る魅力があるに違いない。しかし、残念なことに、一般の人はその物語の本当の意味がよく分かっているとは思えないのである。

中心の出来事の意義

さて、天使、星、博士などといった、クリスマスの物語のドラマティックな細かいところは別にしておいて、その中心の出来事に注意を集中したら、次の事が見られる。あるカップルが政府の命令で旅に立たなければならなかった。女の人はお産が近くて、丁度行先に着くと陣痛が始まったが、宿屋は満員で、彼女は家畜小屋に入らなければならなかった。やっと男の子が無事に生まれ、彼女はあかちゃんを飼葉おけに寝かした……ということである。

この話を痛しく思い、このカップルが可哀そうと感じる人が多い筈である

が、それは別に珍しいこととはいえない。現在病院へ行く途中でタクシーの中で生まれるあかちゃんの事は、トップ・ニュースに値いするとは思われない。同じように、飼葉おけに寝かされたあかちゃんの事も、それだけで済んだら歴史に残らなかった筈である。実は、ある人が生まれるという出来事自体には、深い意味はない。例えば……1818年に、ドイツの Treves という町で、ある Marx さんの奥さんに男の子が生まれ、Karl と名づけられた。又……1542年に、三河の岡崎城で、城主の松平広忠に長男の竹千代が生まれたのである。この二つの例に対して、うんそれでという答えはごく当たり前と思われる筈である。なぜなら、ある人の誕生の歴史的な意義を理解するために、その人の生涯全体を考えてみなければならないのである。

Karl Marx 教授の誕生が歴史に残るのは、彼はマルキシズムの提唱者になったためにほかならない。岡崎城主の長男の誕生が記録に値いするのは、彼の名前は徳川家康になったためにほかならないのである。ところで、現在からナザレのイエスの生涯をふりかえってみると、不思議なことが分かってくる。それは、イエスの生涯の意義は一切その死に集約されているということである。この方は死ぬという目的をもって生まれたと言っても過言ではない。それで、イエスの誕生は非常に重大な事なのは、その死に方とその死の理由のためなのである。

二種類の証言

さて、今からイエスの死を調べて、それがイエスの誕生の意義をどのように示しているかを考えてみよう。特に、イエスが十字架にかかっていた間に、回りの人はイエスについて何を言ったかを調べてみよう。そうすると、驚くべきことに、十字架の回りの人によって言われた事は、イエスが生まれる時すでに何人かに告げられていた。殊に、クリスマスの物語に登場する天使によって告げられたのである。ところで、天使の幻や天使を通してのいわゆる「啓示」について少し疑問をいただく人が多いのであろう。大体の人が、天使の証言よりも、イエスと一緒に過ごしたり、その行動を見たり、その教えを聞いた人の証言がより興味深いと思われる筈である。実はそういう人の意見と、イエスの生

まれる時天使が告げた事とが同である、ということは注意すべきことに違いはない。その点について、三つの例をあげたい。

第一の例で、天使がナザレのマリアに現われ、マリアが男の子を産む予告をする物語がある。その予告の中で、次の言葉がある。

「神である主は、彼に先祖ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの民の治め、その支配は終わることがない」と。¹ これは、ユダヤ人の神聖な書物（今の旧約聖書）に記されている神の約束の一つが間もなく実現するという予告である。というのは、ユダヤ人が一番懐かしがっていた時代は、ダビデ王様の時代である。その時代は、ユダヤが神に与えられた自分の領地に住んで、神に任命された自分の王様のもとに過ごして、神の民として幸福な生活を送った時代であり、ダビデ自身はある意味で理想的な王だった、と思われていたのである。そのあとの時代でイスラエルという王国が崩れてしまい、ユダヤ人は国の独立性を失って、次々にいくつかの帝国に支配されたのである。しかしその暗黒時代に、ユダヤ人は預言者の言葉を思い起こし、神がダビデよりも素晴らしい王様を位につけて下さり、ユダヤ人が更に自分の国に住んで、自分の王様のもとに生活するような幸福を回復して下さるという約束の実現を待ち望んでいたのである。それで天使が言ったような予告は非常に重大であると、当時のユダヤ人は思った筈である。

さて、十字架にかかるイエスの姿を御覧下さい。イエスの頭の上に札があって、それに「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書いてある。² これは、イエスの犯罪（つまり、ローマ皇帝に逆らったこと）を説明するためであったが、この言葉から二つの事が分かると思う。一つは、ローマ総督のピラトは、多くのユダヤ人がイエスを約束された王として認めているということが分かった、ということである。（ここで、イエスを知っていた多くの人の意見がはっきりと示されている。）もう一つは、ピラト自身がイエスをユダヤ人の王の位に値いする人と考えたことと示されているのであろう。札に「ユダヤ人の王」とはっきり書いて、祭司達が文句を言ってピラトに「この男はユダヤ人の王と自称した」と書いてくれとせがんだ時、ピラトは「私が書いたものは、書いたままにしておけ」と答えたのである。³ 実はイエス自身と新約聖書の著者によると、ピラト

とその多くのユダヤ人との考えはある意味で正しかった。正にイエスは約束された王様であった。（その意味は、ユダヤ人が考えたのとずいぶん違うけれども。）

* * *

次に、第二の例で、ベツレヘムの近くに野宿する羊飼いに現われた天使の言葉の中で、「今日ダビデの町で、お前たちのために救い主がお生まれになった。このかたこそ主メシアである」という言葉がある。⁴ 救い主……「メシア」……これも、旧約聖書にある約束が実現する報告である。「メシア」というヘブル語の言葉は、ギリシア語のキリストと同じように、「油を注がれた方」を意味して、神によって任命され、特別な権威を与えられ、神の御計画を実行するために遣わされる方を指すのである。旧約聖書に、メシアが遣わされるのは、神の民を救うためなのだとよく記されている。

そして、イエスの十字架の回りに立っている人の言葉を聞いて下さい。祭司達の言ったのは「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう」ということである。この言葉によって、多くのユダヤ人がイエスはメシアであると信じたのを祭司達が知っていたことが理解できると思う。もちろん、祭司達自身はそれを信じなかったが、彼らの言葉は、イエスと一緒にいたり、その行いを見たり、その教えを聞いたりした多くの人々が、イエスをメシアとして考えてきた、ということの証明である。そして新約聖書によると、その人々のメシアの考えはちょっと間違っていたにしても、とにかくイエスはメシア、救い主だという考えは正しかったのである。

* * *

続いて、第三の例は又、マリアへの予告からであるが、天使は「生まれる子は＜聖なる者＞、＜神の子＞と呼ばれる」⁶ と言ったのである。これはきっと神秘的な言葉であるが、少なくともこの方と神との関係が極めて親しいということが理解できると思う。もう一度十字架にかかるイエスを御覧下さい。イエスが死ぬ時、ローマの百人隊長は「本当に、この人は＜神の子＞だった」と言ったのである。⁷ これは本当に不思議な言葉である。この百

百人隊長はローマの兵隊で、ユダヤ人によって全く真実の神への信仰を持っていないので、異教徒で野蛮人とされていたが、この人こそは死ぬイエスの姿を見て、ある意味でイエスと神との特別な関係を自覚したのである。本当に注意すべきことだと思う。

私達にも当てはまる

ここで私達はこの百人隊長の言葉によって、クリスマスの物語には私達にとっても深い意味や大切な約束があると、分かるのであろう。クリスマスの物語を聞く時、私達は、なるほどこれは、ユダヤ人にとって深い意味を持っているのは当たり前だが、自分には何の関係もないんじゃないか、という風に考えがちなのであろう。しかし十字架の場面で、ローマの百人隊長は今死んだイエスが神の子だと分かったのである。天使がマリアに告げた言葉は、ユダヤ人の思想や信仰に基いていたが、百人隊長は同じ言葉がローマ人の自分にとっても深い意味を持っているのだと理解できたのである。これは全く新約聖書に書いてあるとおりである。天使などによってユダヤ人に言われた約束は、すべての人、オーストラリア人にしても、日本人にしても、どんな人でも当てはまるのである。私達も、そのユダヤ人やその百人隊長と同じように、イエスを王であり、神に遣わされた救い主であり、神の子である方として確認することができるし、その上、彼らよりも私達はそのことを深く理解することができるわけである。なぜなら、私達はイエスについてもう一つの情報を持っているのである。それは、イエスは死んでからよみがえった、ということである。

イエスの弟子達は、イエスの復活の姿を見ることによって、イエスは王、救い主、神の子として彼らのために生まれ、生き、死んで下さったと確信できてきたのである。私達も、イエスは私達の王、私達の救い主として死んで下さったと確信できるように、人間として生まれ、神の子として復活なさったこのナザレのイエスをよく考えてみよう。

〔註〕 1. ルカ 1 : 32 b—33

2. ヨハ 19 : 19

3. ヨハ 19 : 21—22

4. ルカ 2 : 11

5. マコ 15 : 31 b—32

6. ルカ 1 : 35 b

7. マコ 15 : 39

新約聖書の引用は「共同訳」からである。